

「たぶんこうだったんじゃないか」三物語

中四国支部

桑田昭弘

公孫氏政權の誕生と滅亡 《日本の関与》

1. 公孫氏政權の誕生

九州に出来た「新たな奴国」はイザナギがイズモから持ち出した「漢委奴国王」の金印の効力にて後漢に朝貢（倭面土地国王の朝貢）し、倭国王として振る舞っていた。

一方、イズモの「本来の奴国」は朝鮮半島に進出し（新羅の誕生）、「新たな奴国」と後漢との関係を遮ろうと試みていた。

そして、遂に両国は直接の長い戦い（倭国大乱）となった。

西暦189年に遼東地方の太守となった公孫度は、何故か直ぐに独自政權の道を進みだした。それは新羅が公孫度に勢力の衰えた後漢からの独立を促していたのではなかろうか。公孫氏政權の誕生により、「新たな奴国」は後漢への朝貢を断たれ倭国内での影響力を失って、やがて「本来の奴国」とは休戦状態となった。

2. 公孫氏政權の滅亡

西暦220年に後漢が滅亡すると「漢委奴国王」の効力は消滅した。

これにより、倭国大乱の後に休戦状態であった「本来の奴国」と「新たな奴国」は和解し、イズモの祭祀王「ヒメ」（卑弥呼）が、九州宇佐にて倭国全土の王として共立された。

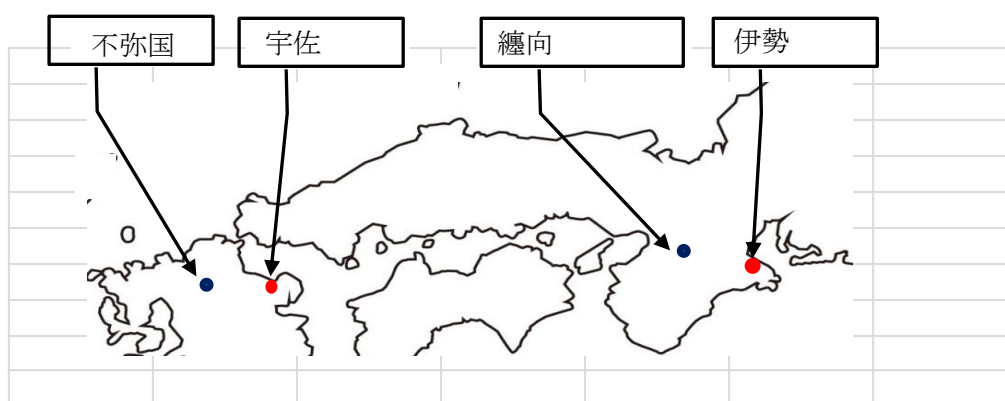
こうなると、魏との国交を望む倭国にとって公孫氏政權は邪魔な存在となってしまふ。

西暦238年に帯方郡を訪れた倭国大夫の難升米を魏は、公孫氏政權滅亡に助勢した功績により洛陽へ連れて行き「親魏倭王」の称号を卑弥呼に授けた。

倭建命と伊勢の地

4世紀初めに倭比売は3代目天照大御神に即位し宇佐へ赴いた。天照大御神は祭祀王として未婚であることが求められていたが、倭比売と補佐役の山幸彦との間に子（武内宿禰）が生まれた。山幸彦は、時の政権を担っていた倭建命の命で瀬戸内の大三島に幽閉（竜宮城）された。倭比売は、子を産めぬように自ら陰部に箸を突き崩御（畿内の箸墓古墳に埋葬）した。倭建命はこの様な事が起こらぬように王の祭祀を政権に近い場所に遷宮する事とした。宇佐（天照大御神の祭祀場所）は、当時の政権中枢であった不弥国の東方の海辺にある。纏向（倭建命の政権中枢地）の東方の海辺の地（伊勢）にて倭建命は新たな斎王による祭祀を行わせた。

宇佐と伊勢の位置

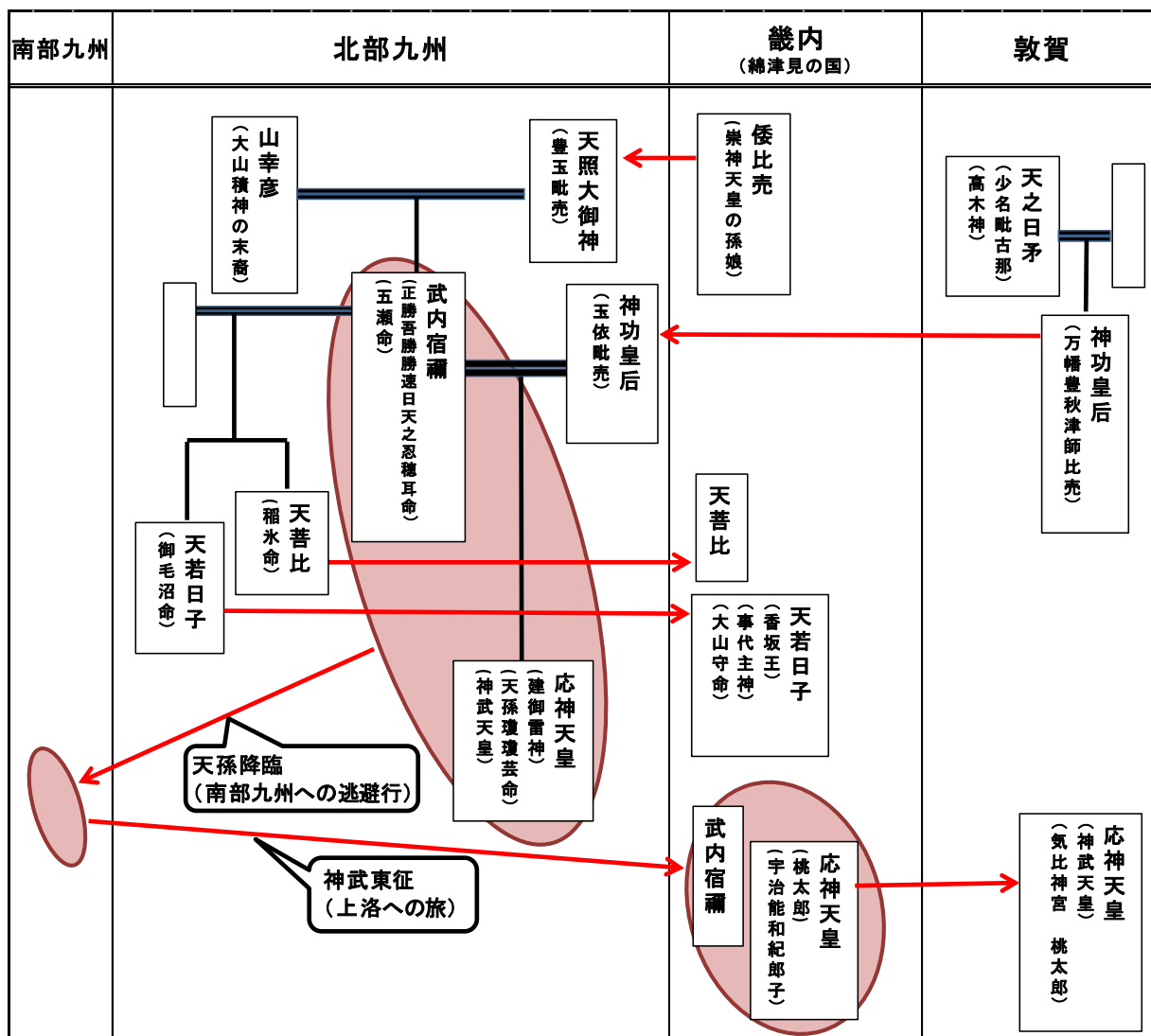


倭比売命の悲惨な最期を知った天之日矛は、倭建命と袂を分ち祖先の地である丹波（敦賀）に移った。そして、引き続き宇佐の地が祭祀の場所であるとし自らの娘（神功皇后）を宇佐へ送り出し祭祀王とした。

倭建命は、天之日矛と二十数年の対峙後に遂に敦賀との国境にある伊吹山にて戦った。その戦で重傷を負った倭建命は、回復を祈願する為に伊勢の斎王の元へ向かったが、途中の三重の地で息絶えた。

武内宿禰の物語

4世紀初に数奇な運命の元に生まれた武内宿禰。下図は、その系統図である。



1. 生い立ち

武内宿禰は生まれて間もなく九州の地で一人となった。(父は大三島へ幽閉、母は崩御) 武内宿禰が未だ幼い頃に神功皇后が宇佐へ祭祀王として赴いてきた。

大人となった武内宿禰は父(山幸彦)と同じく祭祀王(神功皇后)の補佐をする事となった。尚、武内宿禰には既に2人の息子(天善比、天若日子)もいた。

2. 天孫降臨

武内宿禰と神功皇后との間に子(应神天皇)が生まれた。その時、武内宿禰の脳裏に父と母の悲劇がかすめた。

未だ畿内の政権中枢には倭建命が君臨している。ゆえに、武内宿禰は両親と同じ悲劇を避けるべく政権の力が及ばない南九州へ息子(应神天皇)を連れて逃れた。

3. 先遣隊

応神天皇の祖父である天之日矛（高木神）は娘と孫を救うべく倭建命との戦を決意し、伊吹山にて倭建命を討った。そして、武内宿禰に畿内への上洛を促した。

武内宿禰は、先ず、2人の息子（天菩比、天若日子）を上洛させた。2人は山幸彦（大山積神の末裔）と天照大御神（倭比売）の孫であるため迎え入れられ、十数年後に天若日子は倭建命の孫娘を妻とし天皇（香坂王）となった。

天皇となった天若日子は、倭建命の仇を討つため天之日矛の討伐に向かったが逆に討たれて琵琶湖に沈んだ。

4. 神武東征

遂に、武内宿禰（古事記では神武天皇の長兄の五瀬命）は応神天皇を連れて南部九州を発ち畿内へ向かった。旅立ち前に宇佐の地で神功皇后から祭祀の秘宝（桃の種）を授かって、徐々に畿内へ向かった。

吉備にて数年過し（吉備へ桃の種を賜った事で桃太郎伝説の誕生）、その後畿内へ上洛した。武内宿禰は迎え入れられたが、応神天皇は倭建命を討った天之日矛の孫である為に受け入れられなかった。（古事記では五瀬命は絶命したと記録した）

その後 応神天皇は南の熊野から密かに入城したが、やはり受け入れられず、敦賀へ行き祖父（天之日矛）の後を継ぎ敦賀王となった。（気比神宮の旧本殿 梁に桃太郎の彫刻）

武内宿禰は、仁徳天皇（倭建命の孫で天若日子の次の天皇）の父親代わりとなり天皇を補佐し、そして様々に描写された太古からの伝承をひとつに繋げて物語とした。（古事記の〔神話の巻〕となる国記）

5. 蘇我氏 誕生

25代武烈天皇は後嗣がなかった為、武内宿禰の子孫は敦賀王国にて皇統を維持していた応神天皇5世孫である継体天皇を次の天皇とした。

こうして、自らと同じ武内宿禰の子孫である天皇を誕生させたことにより「我は蘇り」蘇我氏を名乗った。

6. 天皇記の曲筆

蘇我氏は、天皇を補佐して歴代の天皇の生涯を記録していた。（天皇記）

応神天皇の正統性（崇神天皇の皇統である）を示す必要があった蘇我氏は、天皇記に「応神天皇は忠哀天皇と神功皇后の子」、「仁徳天皇は応神天皇の子」と記録した。さらに、応神天皇を始馭天下之天皇（はつくにしらすすめらみこと）とする為に敦賀国での応神天皇から始まる皇統を、初代神武天皇から10代崇神天皇以前として天皇記に組み込んだ。

7. 古事記

武内宿禰の国記 及び蘇我氏の天皇記は乙巳の変にて焼失したが、これを誦習していた稗田阿礼にて復元され、後の古事記となった。